

4 重点目標を達成するための今年度の取組と評価基準・評価結果

A 重 点	C短期経営目標(年度末までにどのような状態にするか)	具体的な方策	具体的な取組		成果		自己評価					
			評語	取組に関する指標 (可能な限り数値で)	評語	成果指標(可能な限り数値で)	取組指標		成果指標		考察(コメント)	改善策
							中間	年度末	中間	年度末		
1 知 (確かな学力)	目標時間の家庭学習を行っている児童の割合を85%以上とする。	家庭と連携した家庭学習強化月間を実施する。年間をととして学年の家庭学習目標時間に沿った量の毎日の宿題や自主学習について提示する。	A	家庭学習指導を90%以上の日に実施した	A	目標時間達成の児童85%以上	A	A	B	B	児童82.4%で中間より1.1%下がっている。低学年は1.9%増、中学年4.9%減、高学年1.2%減である。中学年の家庭学習の支援が必要である。	中学年における指導の在り方と学年での統一した支援を徹底する。また、達成感をもたせるような評価シート・積み重ねグラフなど、児童向けに自己の努力が見えるものを開発する。
			B	同80%以上実施	B	同80%以上						
			C	同70%以上実施	C	同75%以上						
			D	同実施70%未満	D	同75%未満						
	図書とタブレットそれぞれの活用の良さを理解している児童を80%以上とする。	情報センターとしての学校図書館の機能整備と計画的・効果的な活用、図書とタブレットの特性を生かした調べ学習を実施する。	A	図書とタブレットの特性を生かした調べ学習を実施し児童にそれぞれの良さを指導した	A	理解している児童80%以上	B	B	B	B	本で調べる77.7%、インターネットで調べる82.4%である。高学年の書籍での調べ学習のポイントが上がっている。	学習や読書時間などで書籍に触れ親しみをもたせる取組をより一層充実させる。情報モラル教育を確立し系統的に指導する。インターネット検索・図書検索の大会を企画する。
			B	図書とタブレットの特性を生かした調べ学習を実施した	B	理解している児童70%以上						
			C	学校図書館の活用計画を確実に実施した	C	理解している児童60%以上						
			D	学校図書館の活用計画の未実施があった	D	理解している児童60%未満						
	児童の90%以上が学習に意欲的に取り組み、通知表の「もう少し」を5%以下とする。	ICT機器等を効果的に活用し、個別学習と対面学習を効果的に融合した指導法改善に取り組む。	A	融合した指導法改善に取り組んだ	A	意欲的90%以上、もう少し5%以下	B	A	C	C	学習したことがよく分かり楽しく学習している89.2%で中間から3.2%増である。通知表のもう少しは4.3%であった。	児童のiPadの使用スキルは上がった。特別教室に電子黒板を配備し、デジタル教科書の効果的な使用や実技教科での映像提供など児童の学習効果を上げる環境整備を行いたい。
			B	形成的評価を大切にした指導と評価の一体化を行った	B	意欲的90%以上、もう少し8%以下						
			C	補助教材や教具の活用など合理的配慮を整備した	C	意欲的80%以上、もう少し8%以下						
			D	児童理解に基づいた授業づくりに取り組んだ	D	意欲的80%未満、もう少し8%以下						
2 徳 (豊かな人間性)	「みんなのきまり」を守っている児童の割合を90%以上とする。うち、◎を50%以上とする。	「みんなのきまり」を指導し、各学級で一か月の振り返りを行い、取組状況の確認と改善点の作成、次の目標を設定する。	A	3/4以上は児童評価を生かした指導の改善や継続に取り組んだ	A	守っている児童90%以上 ◎50%以上	B	B	B	B	みんなのきまりを守っている92.1%で中間比1.9%増(とても42.4%、だいたい49.7%)である。学校のきまりを再編し、児童に分かりやすいものに改善した。	振り返りシートの活用について全校で、次年度は形式を全校統一とし、項目などを考えた年間計画を作成する。また、全校集計、考察、改善策を担当する部署を生活指導部に位置付ける。
			B	1/2以上は児童評価を生かした指導の改善や継続に取り組んだ	B	同80%以上 ◎40%以上						
			C	毎月児童評価を実施し、児童に活動を振り返らせた	C	同70%以上 ◎30%以上						
			D	児童評価が実施できないことがあった	D	同70%未満						
	いじめの早期発見、早期対応を図り、事案確認から1か月以内に解決する。	学校いじめ防止基本方針に則った取組を実施する。いじめ防止標語・ポスター作成、あいさつ運動などの児童活動を行い、いじめ防止を常に児童に意識付ける。	A	他教員と協同して100%対応した。常にいじめ防止を意識して取り組んだ	A	1か月以内に全件解消	A	A	A	A	12月末までの認知件数は174件(7月末までは77件)である。現在77件が解消に向け見守りを継続中である。	いじめの認知について、定義・報告の確認を継続する。次年度もいじめ防止の取組を継続する。また、iPadのGoogleの機能での児童同士のやりとりについてチェックする体制を取る。
			B	アンケートや発生事案に100%対応した	B	2か月以内に全件解消						
			C	アンケートや発生事案に未対応があった	C	3か月以内に全件解消						
			D	計画の未実施があった	D	3か月以上の継続指導あり						
	自分を大切にする児童を90%以上、友達を大切にする児童を95%以上とする。	各児童の道徳振り返りシート等を用いて学習状況や道徳性に係る成長の様子を捉え、適切な評価と指導を重ねることにより児童の自尊感情を高める。	A	振り返りシートを活用し、学習状況の把握と自尊感情を高める指導を実施した	A	自分90%以上、友達95%以上	B	A	B	A	自分を大切90.5%、友達を大切98.3%でどちらも中間から増。自分を大切にしているが初めて90%を上回った。	道徳教育の核となる道徳授業の改善を推進する。また、人権尊重教育プログラムの授業事例を参考に全学級で授業を実施する。自分を大切にすることについてメッセージを発信し続ける。
			B	他教諭の授業を参観し、授業改善を図った	B	自分85%以上、友達80%以上						
			C	全時間において、道徳科の趣旨に基づいた授業を実施した	C	自分80%以上、友達75%以上						
			D	道徳科年間指導計画を確実に実施した	D	自分80%未満、友達75%未満						
通常級・特別支援学級の交流が楽しいと感じる児童を80%以上とする。	学校生活支援シートの作成と情報共有、活用を図る。通常級と特別支援学級の交流活動を推進する。	A	交流活動をととして共生の意識を感じさせることができた	A	交流が楽しい児童80%以上	C	B	D	D	学校が楽しい86.8%(とても48.2%、だいたい38.6%)である。ひまわりとの交流78.6%で8.1%増、他学年との交流84.0%で4.3%増である。	「学校が楽しい」については二極化が見られる。担任以外の教員による児童面接を実施し、児童の思いや悩み、話を聞く機会を設定する。	
		B	通常と特別支援学級の児童の交流を図った	B	交流が楽しい児童70%以上							
		C	特別な支援について、児童に発達段階に応じた理解をさせた	C	学校が楽しい児童90%以上							
		D	教育活動に合理的配慮を取り入れた	D	学校が楽しい児童80%以上							

A 重点	C短期経営目標(年度末までにどのような状態にするか)	具体的な方策	具体的な取組		成果		自己評価					
			評語	取組に関する指標 (可能な限り数値で)	評語	成果指標(可能な限り数値で)	取組指標		成果指標		考察(コメント)	改善策
							中間	年度末	中間	年度末		
3 体 (健康・体力)	体を動かすことが楽しい児童の割合を90%以上とする。	体育学習の内容、方法やかかわりの工夫、体育朝会、年間2回設定した体力向上月間を実施する。	A	年間をとおして休み時間の遊びなど体を動かす取組の工夫を行った	A	体を動かすことが楽しい児童90%以上	B	A	A	A	体を動かすことが楽しい児童91.8%(とても71.9%、だいたい19.9%)である。「あまり」が5.6%、「ぜんぜん」が2.6%である。中間より評価が高い方に移行している。	縄跳びやジョギングなどの取組をより活性化するとともに、特に中学年の体育学習授業の改善を推進する。体を動かすことの楽しさが低学年の状態から続くようにする。
			B	運動に親しむための授業改善に取組んだ	B	同85%以上						
			C	体育学習における児童同士のかかわり方を工夫した	C	同75%以上						
			D	体力向上月間の取組を推進した	D	同75%未満						
	健康に元気に過ごしている児童の割合を90%以上とする。	校内委員会や夕会において児童の情報を共有し、適切かつ効果的な指導を全教職員で行う。心と体の関係についての体験的学習を全学年で実施する。	A	他教員と協同し、児童への適切で効果的な指導・支援に取組んだ	A	健康に元気に過ごしている児童90%以上	B	A	A	A	健康に気を付けて元気に過ごしている児童94.7%(中間比2.5%増)である。昨年度に比べても高学年が高くなっている。	心と体の関係についての学習について、区小教研体育部の授業を参考に体育授業を改善する。また、感染症に係る知識や対応について継続して指導を重ねる。
			B	児童への適切で効果的な指導・支援に取組んだ	B	同80%以上						
			C	健康についてに実態に応じた指導を行った	C	同70%以上						
			D	心と体を一体としてとらえた学習を行った	D	同70%未満						
	学年に応じたSOSの出し方を理解し、だれかに相談できる児童の割合を90%以上とする。	発達段階に応じたSOSの出し方について具体的に指導する。特に、年度始め、長期休業日前は重点的に行う。教員はSOSを敏感に受け止める感覚を養う。	A	重点時期に確実に指導した	A	だれかに相談できる児童90%以上	B	B	D	B	相談できる76.7%(とても39.0%、だいたい37.7%)で3.9%増である。中間比で低学年7.6%増、中学年3.3%減、高学年6.0%増である。中学年の7学級中3学級で下がっている。	自我の芽生えなど、児童の成長過程や発達段階を捉えた効果的な支援や理解の方法を検討・策定・実施する。特に中・高学年について、SCや純化相談員など臨床心理士のアドバイスをもらう。
			B	研修・研鑽を重ねてSOSを敏感に受けとめる感覚を身に付けた	B	SOSを受けとめる感覚が向上した(教員)						
			C	具体的なSOSの出し方を指導した	C	だれかに相談できる児童75%以上						
			D	適切に指導できなかった	D	だれかに相談できる児童75%未満						
	安全に気を付けて生活している児童の割合を90%以上、自転車安全利用五則遵守を95%とする。	安全指導計画に則った指導を確実に実施する。	A	安全について、年間を継続して意識をもって児童に適切に指導した	A	安全に気を付けて生活している児童90%以上、自転車安全95%以	A	A	B	B	安全96.2%(中間比1.4%増)、自転車92.4%(同2.1%増)%である。月1回の安全指導の他、適宜学年での指導を行った。また、全校朝会で健康・安全の大切さを校長が繰り返し伝えた。	自転車安全について、学校で得た知識の実行を見守り監督するのは家庭である。家庭への啓蒙と協力を求めながら、児童へは自転車事故について発達段階に応じた指導を行う。
			B	学年で共有化した指導を行った	B	同85%以上、同90%以上						
			C	学校安全計画に基づく指導をほぼ100%実施	C	同80%以上、同85%以上						
			D	学校安全計画に基づく指導ができなかった	D	同80%未満、同85%未満						
4 働き方	区の条例施行規則を遵守し、時間外勤務の上限について月45時間、年間360時間を目標とする。	校務分掌組織を改編し分掌の改善を図る。庶務事務システムを活用し業務量の適切な管理を図る。	A	月45時間以下が10か月以上、年間では360時間以下	A	ライフ・ワークバランスに改善があったと感じる教職員が80%以	B	B	C	C	1/20時点で時間外勤務が360時間以上の職員は、36人中16人である。1年生・5年生・6年生担任12人は全員である。360時間以下を達成できそうなのは18人である。	必要な校務と時間外勤務、精神的肉体的疲労、充実感、安心感などを鑑み、個々の心身の健康をもとに対応していく。
			B	月45時間以下が8か月以上、年間では360時間以下	B	同75%以上						
			C	月45時間以下が6か月以上、年間では360時間以下	C	同50%以上						
			D	月45時間以下が4か月以上、年間では360時間以上	D	同50%未満						
5 連携	(自己肯定感)自信のあるところのないところを含め、自分自身にだいたい満足している児童を75%以上とする。	児童をよく見て気付き、児童によさを伝えとともに、保護者・地域を啓蒙し連携・協力していく。	A	家庭と連携して取り組んだ	A	児童の肯定的評価75%以上	B	B	A	A	児童評価82.1%(1.5%増)で「とても」36.7%、「だいたい」45.4%である。低学年90.0%(中間比2.9%増)、中学年81.7%(同2.0%減)、高学年72.1%(同0.7%増)であった。	5年生が77.0%、6年生が67.3%であり、改善が見られる。行事での保護者からの児童へのメッセージの取組を継続し、さらに多くのメッセージ数となるよう保護者に呼びかける。
			B	よさを児童に十分インプットした	B	児童の肯定的評価60%以上						
			C	よさを児童にインプットした	C	児童の肯定的評価45%以上						
			D	児童のよさを見出す力を向上させた	D	児童の肯定的評価45%未満						
	数学・算数、英語・外国語について、学力を向上させる取組を構築する。	抽出生徒・児童の学力調査の分析及び相互の授業観察等から、学力向上に係る具体的な方策を立て実施する。	A	習熟度に応じた学力向上の手立てを立てて実施、検証、改善した	A	2教科で有効な方策を見出した	B	C	C	A	改定した授業改善プランに基づき授業改善を図った。学習アプリ「Monower」に継続して取り組んだ。外国語学習において英語専科による指導が確立できた。	学習アプリの使用について、早急な区教委の対応を求める。授業改善プランの実施状況と効果検証を進め、学習指導の改善に生かすとともに個別最適化した学びの方法について検討する。
			B	授業改善プランの実施状況と効果を検証した	B	1教科で有効な方策を見出した						
			C	学力調査結果を基に授業改善プランを改善した	C	小中連携して実施した						
			D	小中の教員の交換授業等により指導方法の改善を図った	D	有効な方策は見出せなかった						